

議長賞

もう一方にも目を向けて

「誰でもいいなら、私を殺してもらった方がよっぽどよかった。」

これは、千葉県で起きた殺人事件で逮捕された中学三年生の家族の言葉だ。この事件の加害者家族への取材記事を読み、私と同じ年の生徒が殺人事件を起こしてしまったことに衝撃を受けた。

また、成長を見守ってきた家族に「自分が死んだ方がよかった。」

という重い言葉を言わせてしまうことに、酷く胸が締めつけられた。加害者の生徒は、長く少年院に入るために誰でもいいから人を殺したかったそうだ。しかし、必ずしも少年院に入れるわけではないし、ずっと少年院にいることはできない。少年院から出てきた時に、一番近くで支えられるのは家族ではないかと思う。だが、家族が身元引受人になる義務はなく、実際に身元引受を拒否する場合もあるという。このような状況になると、たとえ加害者が更生できていたとしても、支える人がいなければ再び罪をおかしてしまう可能性が高くなると思う。

ではなぜ、身元引受を拒否する場合があるのだろうか。一つの原因として、加害者家族に対する過剰なバッシングにより、追い

堺市立 平井中学校 三年

古根川 楓

つめられるからだと考える。加害者が少年院に入院している間、SNSが発達した現代の社会では加害者や加害者家族の個人情報が特定され、加害者家族でさえも加害者であるかのように拡散されている。そうになると、仕事を辞めたり、引っ越しをしたりせざるを得ない状況になる。さらに、損害賠償を請求され経済面でも困窮する。このような状況で、誰が加害者をサポートできるのだろうか。

調べてみたところ、現在、日本で加害者家族を支援する団体は三つしかなかった。早いものから順に、二〇〇八年、二〇十五年、二〇十八年に設立されている。全国の加害者家族を支援するには、あまりにも数が少ないように思える。また、私が生まれる二年前までは、そのような団体が無かったということに驚いた。支援団体設立以前の加害者家族は、きつと助けを求める場所もなく、心情を理解されることもなく、社会的にも心理的にも孤立していただろう。

もちろん、被害者やその家族の支援を第一に考えるべきだ。そ

れと同時に、加害者とその家族の支援も行う必要があると思う。
これまでも述べたように、加害者家族は命を絶つ人もいるほど追いつめられている。今回この作文を書くにあたって、加害者家族についてインターネットで調べていて、「加害者家族」と入力したところ、検索予測に「許せない」、「地獄」、「幸せになっちゃいけない」などといった言葉が出てきた。きっと、加害者家族に対してそのような思いを抱く人もいるのだろう。しかし、加害者と加害者家族は同一ではない。さらに、冒頭の千葉の事件では、加害生徒の父親が、何かしら悪いことを起こすのではないかと考え警察へ相談に行っていたそうだ。それでも事件は起きてしまった。たとえ予兆があったとしても、家族は加害者をコントロールできない。そうなると、必要以上に罪の意識を感じ、追いつめられてしまうだろう。

日々、いろいろな犯罪が起きていて、誰もが加害者側になりうる可能性がある。そのため、加害者や加害者家族の問題に目を向け支援していくことが必要だ。

